

『グルマンディーズ』—翻訳と注釈—

金山 富美

はじめに

フランス料理とその食文化の粋がヨーロッパ大陸から海を超えて多くの人々の手に届いて久しく、われわれも日々さまざまな形で「食べ物を味わう喜びの歴史」のレールの上を走り続けている。また洗練と芸術的で食卓が彩られるようになった18世紀以降に関しては、種々の書物でフランス食文化の知識を得、その世界に浸ることができる。一方、テーブルマナーの導入と普及が見られたルネサンスからさらに遡った中世フランスの食文化に関しては、残念ながらまだ十分な数の翻訳文献が届けられていないという状況がある。その理由のひとつに、当時の実態がいわゆる「美食」、言い換えればわれわれが一般にフランス食文化に抱くイメージとかけ離れているという点が挙げられるのかもしれない。

以下に試みるのは、フランス文化史研究者フロラン・ケリエの『グルマンディーズ—ある大罪の歴史—』(*Gourmandise – histoire d'un péché capital*, Florent Quellier, Armand Colin, 2010) 第一章の訳出である。そこでは中世の食の世界が詳細に描かれ、ヨーロッパの食文化に関するもっとも根源的な問題に対する問いかけがなされている。考察に用いられる中世の写本には、上述のように日本人の感性では受容しがたい場面が少なからずある。しかし、それらの描写からは、見事な果樹園の土壌作りに欠かせない肥料にたとえられるもの、つまり豊穡な近代フランス食文化の根幹にある「腹の哲学」が浮かび上がる。

ブリヤ＝サヴァランは「どんなものを食べているのか言ってみませう。君がどんな人間であるかを言いあててみせよう。Dis que ce que tu manges, je te dirai ce que tu es.」(*Physiologie du goût*, Flammarion, 2001, p.19) と明言した。このアフォリズムに代表される、18世紀の美味学者が展開するガストロノミー（美味哲学）の数々は、いずれもグルマンディーズから発生し、たえずグルマンディーズへと回帰して問い直されるべきものであろう。食がどのように人間のあらゆる欲望と手を携えてきたか、いかに社会・経済・宗教・文芸等の様々な営みと強く関わってきたのかを、グルマンディーズの歴史はわれわれに解き明

かしてくれる。

グルトヌリ ヴォラシテ
中世における大食と貪食

一人の修道士がとある村に出向き、そこの住人に肉を所望した。住人が肉をもうしばらくとろ火で煮込まなければならぬと答えると、修道士は「急いでくれ。なんなら串焼きでかまわぬ！」と言う。そこで串を用意していると、修道士はもはや辛抱できず、肉をひと切れとって澳の上に投げた。そして、その燃えるように熱い肉の切れ端をつかみ、おのれの口に詰め込んだ。修道士は硬直して死んでしまった。自身の貪食のせいで。

オドン・ドゥ・クリュニーⁱ『コラシオーネ』917頁～927頁

フランス王シャルル6世(1368～1422)によって1389年5月にサン＝ドゥニ王立大修道院で開催された騎士団の大祝宴会は、国王夫妻をはじめ取巻きの若々しさ、彼らの親密さ、そして過剰なほどにふるまわれた料理の数々とワイン、芝居、ダンス、音楽に彩られたもので、後に歴史家ジュール・ミシュレ(1798～1874)はそれを「墓場と隣り合わせの大饗宴」と評する。たらふく食べた陪席者のなかには高位聖職者の姿も見られ、さらに食べ続けようと、いったん食べたものを吐き出すことさえいとわなかった。

「私はこのような堕落を避けるよう、後世の人々に申し上げたい。なぜなら、皆さま方、溢れんばかりの料理が並ぶ食卓に夜昼となく身を預け、酔いに任せた無軌道ぶりに至れば、王の存在に敬意を払うこともなく、そのうち神の家の神聖さを汚し、放蕩と不義へと流されてしまうからだ」と、サン＝ドゥニの修道士ミシェル・パントワンは著書『シャルル6世年代記』(1380～1420)に記している。

王の権威を示す場所であるとともに聖域、かつカペー王家の霊廟でもあった大修道院を、こうして三重の意味で冒涇した祝宴に、同時代の年代記作家は、

ⁱ ベネディクト派修道士(878?～942)。クリュニー修道院第二代院長であり、クリュニーの戒律の発展に大きく貢献。

有罪判決を下さざるをえなかったのである。王家の威厳も、グルマンディーズとその悪徳と隣り合わせの色欲の襲撃から逃れることはできない。サン＝ドゥニの祝宴に関する記述は、世俗社会に対する一修道士の見解にすぎないとはいえ、14, 15世紀のフランス王国にきわめて深刻な道徳的危機が起こっていたことを伝える。ちなみに、遡ること30年前、ボワティエの戦い（1356年）でのフランス軍の不名誉な敗退ⁱⁱの後、貴族が本来もつべき戦士の情熱を柔弱化させた要因の一つに、このグルマンディーズが挙げられていた。

七大罪の一つ「もの食う口」

教会はグルマンディーズの罪を、ラテン語の「咽喉 *gosier*」を語源とする「もの食う口 *gula*」にあるとする。この悪徳はキリスト教史において、きわめて特異な地理的、人間的な背景のもとに登場した。砂漠の聖父、エジプトの砂漠で最初に共同生活を営んだ隠修道士によって誕生したのである。神へと向かう魂の高揚を阻害しないように、彼ら修道士は自らの肉体に厳しい禁欲を課していた。365年頃、エウアグリオス・ポンティコスⁱⁱⁱは、悪魔が自分たち修道士を迷わせようと吹き込む悪しき想念を、八つの悪徳として列挙した。節制と禁欲に対置されるグルマンディーズは第一の誘惑、色欲は第二の誘惑とされ、「もの食う口」の罪と色欲は互いに切っても切れない悪魔的相方として、長い蜜月を約束されることとなる。八つの悪徳は、グルマンディーズ、色欲、吝嗇、悲嘆、憤怒、怠惰、虚栄、傲慢というように身体的な悪徳から精神的なものへと配列され、もっとも重い罪は傲慢に極まれるのだが、この順列は悪徳の行程であるため、グルマンディーズは他の悪徳を誘発するものと解釈できる。したがって、修道院は規律によって「もの食う口」の欲望を封じるよう留意しなければならず、そのために日々、生命を維持して勤めを遂行するに足る程度の食事を心がけ、一日一人分の糧食の量と質とを正しく定め、食事の時間は正確に、特に断食によって食の節制を行うのである。

ⁱⁱ 英仏百年戦争のなかの戦い。兵士の数では上回っていたものの、フランスはイングランド軍の巧みな戦術の前に敗北し、王ジャン2世は捕虜となる。フランス王国に経済的打撃を与えた。

ⁱⁱⁱ エジプトの砂漠で修道生活を行ったキリスト教神学者（345～399）。『修行論』等の著作があり、修道生活の理念を伝えた。彼が唱えた「八つの想念」—大食、色欲、吝嗇、悲嘆、憤怒、怠惰、虚栄、傲慢—が、後に「7つの大罪」とされる。

断食は、神の国の本質であり様相ではないだろうか。断食は魂の糧であり、精神の食べ物、天使の命、過ちの死、負債の消滅、救済の手段、恩寵の根源、純潔の源である。断食によって、われわれはより早く神のもとに至れるのである。
(ミラノのアンブロシウス^{iv})

八つの悪徳を記した目録は420年頃、ジャン・カシヤン修道士^vが受け継ぎ、ヨーロッパ各地の修道院に広く伝えた。6世紀末、ローマ教皇（大聖）グレゴリウス1世がこれを自身の『ヨブ記註解』のなかで再検討し、適宜項目を入れ替え、まとめ直す。グレゴリウス1世はもっとも重い罪から並べ、自己への行き過ぎた執着心である虚栄・傲慢を第一番に置き、グルマンディーズは最後から二番目、色欲の前に並べ直した。こうして虚栄、妬み、憤怒、悲嘆、吝嗇、グルマンディーズ、そして色欲という新たな配列がなされる。グレゴリウス1世の目録は中世の道徳と文化の基礎であり、ここにキリスト教信者への教えである七つの大罪の誕生を見ることとなったのである。これが13世紀以降、ちょうどその頃に組織されたドミニコ会やフランシスコ会など托鉢修道会によって普及していく。ラトラン4世が1215年に開催した公会議では義務となり、罪の告解にあたっては、この七つの大罪に照らし合わせて問題の提起がなされることとなった。その後、配列はさらに若干修正され、グルマンディーズは傲慢、吝嗇、色欲、憤怒の後の5番目に位置し、妬み、怠惰を後ろに従えて現在に至っている。

グルマンディーズ——小罪でありながら恐ろしい結果をもたらすもの

グルマンディーズという罪を教会はどのように語っているのか。グレゴリウス1世によれば、その罪は、1) 食事時や定められた時間を待たずして食べること、2) 「身体に必要とされる以上の」飲食、3) 食い意地をはって食べること、4) 入念で「ぜいたくな」料理法を用いたり、豊かな食べ物、「洗練された」料理を好むこと、である。食事の時間を待たずに食べることを罪と定める点には修道院の影響が見られるが、これが世俗社会に普及するにつれ、グルマンディーズの意味に変化が生じていった。理想とされる節度の真反対に位置することに

^{iv} ミラノの司教 (340~397) で、四大ラテン教父・四教会博士の一人。

^v マルセイユのサン=ヴィクトール大修道院の創立者 (360~435)。

は変わらないが、世俗においてはもはや節約や身体的な禁欲は問題にはならないため、グルマンディーズの罪深さは軽減されたのである。また、食事で感じる喜びと身体の生理的欲求とを分別するのは困難であるため、罪であるとはいえず、曖昧さを帯びていく。

中世の神学者は実際、グルマンディーズの罪深さをさほど強調しはしない。なぜなら、その先に控えるより危険な影響と比較すれば、軽い罪にすぎないからである。動物的な喜び、猥褻、純潔の喪失、度が過ぎる饒舌、そして分別の低下は、グレゴリウス1世によれば「もの食う口」の兄弟である。猥褻でおどけた身振りや歌、冒瀆的な言葉、饒舌、精神朦朧、馬鹿げた喜びなどは、大食漢の言語と身体に酩酊が影響した結果であり、公然と非難されるべきである。このように、舌の罪は部分的にグルマンディーズと関連づけられており、同様のことはその他の憤怒、妬み、また色欲などにもいえる。修道院の規律が食事の中に静寂を強い、会話ではなく聖書の朗誦をすすめる理由は、そのようにして身体の糧より魂の糧を、味覚よりも聴覚を優位に置くことによって、生理学的にも時間的にも直結しているグルマンディーズと饒舌との危険な連動を阻むためなのである。口は悪魔が人間を襲撃する玄関口であり、言葉と体内化の交差点なのだ。

大罪の一つであるグルマンディーズは、ときにそれが感覚を興奮させて色欲に誘うなど、より深刻な他の大罪の元凶になりかねない。酒、食べ物ではとりわけ肉や香辛料の効いたソースの過剰摂取は、身体と魂を興奮させやすいという。14世紀の『農夫ピアズの幻想』^{vi}では、誘惑者は香辛料^{vii}をえさに、教会に通う大食漢を待ちぶせしており、また神学者ジャン・ドゥ・ジェルソン(1363～1429)^{viii}は聴衆を教化する際に、香辛料が効いた料理を味わったとたんに肉の罪を犯してしまった好色な男を例に挙げた。人々の舌がほぐれると身体が接触しあい、道徳心はぐらつく。酩酊はグルマンディーズの罪のきわめて重篤な様相を示し、そこから口論に発展したり、殺人という極めつけの乱暴な行為に至ったり、あるいは猥褻で冒瀆的な言葉を吐いたり、ささいな身体的接触から婚姻外の、また生殖を目的としない性的関係へと誘われる危険性がある

vi 詩人ウィリアム・ラングランドの筆によるとされる夢物語詩。

vii コショウ、シャクヤクの実、ニンニク、ウイキョウの実などが挙げられる。

viii パリ大学総長として大学の威厳を高めた人物で、1378年にはじまるシスマ(カトリック教会大分裂)の収拾に貢献した。

というのである。飲食を好み、それを大いに楽しむ人間は、潜在的に社会的混乱や騒動の要因を備えており、生理的な必要性を超えて食べ過ぎたり、自身が属する社会階級に見合わないぜいたくな料理に心奪われる大食漢は、神がそうと定めた肉体、つまり生まれながらのものであり、その後も不変であるとされる「社会的身体」の均衡を崩してしまうのだ。

悪徳にまみれ、汚れ、社会に背く「もの食う口」には、実際、屈辱的な罵言が浴びせられる。中世に用いられた罵詈雑言を裁判記録や文学等の文献で探ると、大食漢「グルトン」およびその派生語（グロズ *gloz*, グロ *glot*, グル *glou*）は、がつがつと獣のように喰らう人間「ゴワンフル」を指す他、「墮落」や「放蕩」の意味も含んでおり、色欲と無縁ではないことを示唆する。「グルトン」は「強欲」,「渴望」,「貪欲」も意味する。この言葉が女性形で使われると侮蔑の程度は一層激しく、腹の貪欲と抑制のきかない性欲との関係が強調される。女性形「グルトンヌ *gloutonne*」や「グルート *gloute*」は売春婦の形容そのもので、アルプス山脈南西麓の町マノスクでの裁判（1260年5月31日の記録）では被告の女性がこの言葉を使って非難され、またディジョン（1404年2月の記録）では、悪い仲間に誘われて道を誤った娘に向かってその母親が「なぜおまえはグルートになってしまったのだ」と憤っている。ごくまれではあるが、当時は「フリアン *friand*」^{ix}も侮辱の表現として使われることがあり、その場合には性的な意味合いがより強く意識された。「グルトン」「フリアン」の悪評は、いずれも「もの食う口」と色欲双方に由来しており、そのことにより、聖職者に限らず中世末期の人々が、腹と腹の下という二つの部位の観念を結びつけて把握していたことが理解できる。「踊りは太鼓腹から起こる」という諺も、そこに理由がある。

「もの食う口」は原罪か

グルマンディーズの罪は、聖書ではどの逸話に基づいているのだろうか。実は、七大罪は聖書に記載されておらず、十戒で言及されることもなく、マタイによ

^{ix} 現在は通常「～が好き」という意味で用いられるにすぎないが、「甘い菓子が好きな人」という意味ももつ。

^x 旧約聖書、ヘブライ語聖書『創世記』25章～36章に登場する人物。イサクを父、リベカを母として、イサク60歳のときに、双子の弟ヤコブとともに生まれた。エサウは狩人となり父に愛されたが、ある日、空腹に耐えかね、弟ヤコブが作ったレンズマメの煮物を望み、それと引き換えに自らがもつ長子の権利を譲ると口約束をしてしまう。

る福音書で「口に入るものは人を汚さず、されど口より出づるものは、これ人を汚すなり」(マタイ福音 15.11) と触れられるにすぎない。しかし、数多くの物語からなる旧約聖書には、すでにキリスト教初期の頃からグルマンディーズの罪の典拠が示されていることが読み取れる。エサウ^xがレンズマメの料理と引き換えに長子の権利を譲渡した話は、理性を欠いた食べ物への渴望を語っており、レンズマメ料理がきわめて下賤な一品であったからなおのこと、それが強い示唆となる。また息子ハムの子孫に呪いをもたらすきっかけとなったノアのみだらな踊り^{xi}、ロトの近親相姦^{xii}、そしてホロフェルネスの死^{xiii}は、酪酊を糾弾する物語といえる。さらに、イスラエルの民が約束の地へと至る途上で偶像崇拜へと移行していく背景には、彼らが神から授かったマナよりも美味しい食べ物に欲望したことを契機としており、グルマンディーズを「腹の崇拜」として非難する逸話として解釈できる。パプテスマのヨハネ(洗礼者ヨハネ)の死の宣告は、大変なご馳走が並ぶ饗宴のさなか、ヘロデ王によって下される。このように、聖書の逸話にはグルマンディーズに予防線をはる説教が分かりやすく示されており、しかもその数は多い。どうやら、人の最初の過ちは「もの食う口」による躓きであったらしい。

エデンの園の物語で、誘惑者である蛇はイヴに次のようにたずねている。

—それでは神は、園にあるどの木からも取って食べるなどいわれたのですか。

女は蛇に答えた。

—私たちは園の果実を食べることは許されていますが、ただ園の中央にある実は取って食べてはならない、触わってもいけない、死んでしま

^{xi} ノア(ブドウ栽培とワイン造りの創始者とされる)は、あるときワインに泥酔して裸で眠ってしまう。父の裸を見たハムは兄弟たちを呼んだが、セムとヤベテは顔を背けて父の裸を見ず、着物で覆ってやった。それを知ったノアは、ハムの息子カナンを呪い、カナンの子孫がセムとヤベテの子孫の奴隷になるだろうと予言する。

^{xii} ロトは、ソドムに遣わされた天使を通して、ヤハヴェがソドムとゴモラを滅ぼそうとしていることを知る。夜明前に妻と2人の娘を連れて町を脱出したロトだったが、「決して後ろを振り返ってはいけない」との指示に背いた妻は「塩の柱」と化する。ロトは2人の娘とともに山中の洞窟に移住するが、娘たちは父を酔わせて近親相姦に至る。

^{xiii} アッシリアの將軍ホロフェルネスは、ベトリアという町で美しいヘブライ人の寡婦ユディトに誘惑される。ユディトは將軍に酒を飲ませ、酔いつぶれたところで首をはねる。

うことになるから、と神にいられています。

蛇は女にいった。

—あなたがたは決して死ぬことはない！神は、それを食べるとあなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となることを知っています。

女がその木を見ると、美味しそうで、目にも快く、なるほど賢くなるのももっともだと思われた。そこで女はその実を取って食べた。また、共にいた夫にも与えたので、彼も食べた。 『創世記』3章1-7

聖アウグスティヌスを注目すべき例外として除くが、中世の神学者にとっては、原罪の由縁は傲慢と不服従のみにあらず、グルマンディーズを巻き込むものだった。4世紀のミラノ司教、教父であったアンブロシウスは、自ら語る天地創造の物語に「そして食べ物もたらされるや、世界の終末がはじまった」と述べ、グルマンディーズが「楽園からそこに住んでいた人を追い出した」と綴る。

13世紀の説教師チョバムのトマス^{xiv}の弁に耳を傾けよう。彼は「グルマンディーズは卑しむべき悪徳である。なぜなら最初の間人はグルマンディーズの罪によって失墜したのだから。実のところ、多くの人々が語るように、たとえ最初の罪が傲慢の罪であったにせよ、そこでアダムがグルマンディーズの罪を犯さなかったら、彼は有罪とされることはなかったであろうし、彼と共にある人もそうはならなかっただろう」と語る。グルマンディーズは原罪の責を負うだけにとどまらず、人を否応なく色欲へとしむけるもの、というのだ。再び楽園の話に戻ろう。アダムとイヴは禁断の果実を食べてしまうとすぐに「自分たちが裸であることが分かり、イチジクの葉をつづり合わせて、腰に巻いた」(『創世記』3-7)。ジャン・カシヤン修道士(5世紀)の教え^{xv}からまもなく、身体に関わるこれら二つの悪徳は強く結ばれ、過度のグルマンディーズは色欲に直結するとみなされた。グレゴリウス1世は、解剖学的とも呼びうる見地から「生殖器は肢体の配置において、腹の下に置かれている。したがって、乱れた

^{xiv} バリ大学で神学を講じた学僧(1158?~1235年)。『聴罪司祭の大全』を著す。

^{xv} 訳注vを参照。ここではカシヤンの12冊からなる『共住苦行生活の教え』(426年)を問題にしている。

形で腹にぎっしり詰め込まれると、生殖器は興奮して色欲へと向かう」と力説する。この関係は、夫を誘惑するイヴの姿態からも説得性をもつ。イヴが差し出した身の締まった丸いリングは、彼女自身のむき出しの胸を想起させずにはいないのだ。「もの食う口」と色欲との間では、身体と食べ物の両方を意味する「肉 *carne*」という言葉が、その両義性を存分に発揮している。

『新約聖書』にも『旧約聖書』と同様の古典的解釈をすると、そこにはグルマンディーズと色欲との結びつきと、原罪へのグルマンディーズの関与を再確認させる物語が盛り込まれていることが明らかになる。ヨハネは「すべて世にあるもの、肉の欲、目の欲、そして富に対する奢りは、御父から出るのではなく、世から出る」(『ヨハネ第一の手紙』22-16)と述べている。この一節が通常七つの大罪の典拠と理解されており、最初に挙げられる「肉の欲」が「もの食う口」と性欲を示唆すると解釈されたからこそ、グルマンディーズは原罪と結びつくのである。荒野での40日にわたる絶食の後、空腹のイエスが悪魔の試みにあったとき、まず最初に闘わなければならなかったのは食べ物の誘惑であった。

すると誘惑者が近づき、こういった。

—もしおまえが神の子であるなら、これらの石がパンに変わるよう命じてみよ。

だが、イエスはこう答えた。

—「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言葉による」と書いてある。(『マタイによる福音書』4-4)

またパウロは「腹を神とする」者は「この世のことにしか価値を認めず」(『フィリピ人への手紙』3-19)、そのような人間は滅びるだろうと警鐘を鳴らす。ここで、中世の神学者や説教師は、グルマンディーズを原罪と結びつける『創世記』の物語に対する自分たちの解釈がまちがってはいないと確信を得たのである。地獄の凶像表現に炎と監禁(閉じ込め)と煙がつきものであり、それが料理の世界を想起させること、また暗黒世界の入り口が動物の姿をした悪魔の大きく開いた口で象徴され、罪人がそこに呑み込まれていくのは、よって偶然ではないのだ。「もの食う口」は、人間が根源的に背負う罪深さの責を負い、地獄の表象に刻印されているのである。

「もの食う口」の身の毛もよだつ表象

写本を彩る細密画、中世の教会のフレスコ画や彫刻などには「もの食う口」が描かれている。太鼓腹の大食漢「グルトン」が、肉やワイン壺満載の食卓についている情景はもっともよく見られるものだが、それはグルマンディーズのなんたるかを容易に見て取れるようにするためである。悪魔に憑かれた一連の動きのなかで七大罪に誘われる様子が示されるが、そうした騒々しい悪徳のうち、15世紀に多数の写本を飾り、宗教建物の壁にフレスコ画として描かれたモチーフは、でっぴりとふくらんだ腹をした異常肥満の男が片手でワイン壺、もう一方の手に肉を握り、オオカミやカメにまたがる姿である。オオカミとカメは中世の動物譚で大食を象徴するが、ジャン・ドゥ・ジェルソン^{xvi}はまた、グルマンディーズの喩えにクマも用いた。イギリスでもっとも有名な大食漢像の一つはノリッジ大聖堂（15世紀）で見ることができるが、カメにまたがった彼の手には、ワイン壺ならぬビールのジョッキが2杯握られている。同じヨーロッパでも悪徳のモチーフに地域色が出ている例であり、そこには明らかに信者の心を動かそうという教育的配慮がうかがえる。

中世末期の200年間、地獄で与えられる苦しみの詳細な描写から、その悪人がいかなる罪によって罰せられているのかを読み取ることができる。14世紀から15世紀のイタリアのフレスコ画で、大食家はタンタロスの苦しみを与えられる姿で描かれた。ギリシヤ神話の登場人物タンタロス王は、神々に捧げる料理をくすねた罪によって、美味な果実がたわわに実る木の下、永劫の飢えと渇きに苦しまなければならないようになった。このような例はブオナミーコ・ブファルマッコが1330～1340年頃にピサで描いた地獄にも、タッデーオ・ディ・バルトーロの手で1393年～1413年頃描かれたサン・ジミニャーノ（トスカーナ州）のそれにも同様に見られる。大食漢の男女が、鶏の串焼きや、同時代の人間なら思わずつばを飲み込んでしまうような見事な肉、そして口当たりのよさそうなワインが並ぶ食卓の周囲に集まっているが、ご馳走をすぐ鼻先にしながら、悪魔に食べることを妨げられている。ある大食漢は悪魔が手にする串焼き肉に食らいつこうと飛びかかったのにもかかわらず、自らが串刺しになり、また、ある大食家は悪魔の排泄物を呑み込むよう強いられている。大食漢の男や女の口から顔を出している緑色のへびは、口の罪そのものを表す。

^{xvi} 訳注 viii 参照。

アルピのサント・セシル大聖堂の壁画に描かれる大食漢は、15世紀末の挿絵本『羊飼いの暦』のなかの版画に似た造形で、イタリアのフレスコ画に描かれたタントロスの責め苦とはまったく逆の形で拷問を受けている。盛りだくさんの食べ物が並ぶ食卓につき、悪魔にそれを食べるように強いられるが、当の食べ物は美味しい鶏肉ではなく、身の毛もよだつ醜いヒキガエルなど不浄のものである。よく似た例は、フランドルの画家ヒエロニムス・ボスが1475年～1480年頃に制作した七つの大罪にも見られ、ここで大食漢は生きたままのヒキガエルやヘビ、トカゲを食べよう強制されている。地獄で大食漢を苦しめる中世の嫌悪すべき動物には、虫も含まれる。13世紀以降、托鉢修道会は、当時、闇と湿気のなかでわき、そこに潜むと考えられた醜悪なヒキガエルをわざわざ選び、人々をグルマンディーズの罪から遠ざけようと努めた。ヒキガエルは「もの食う口」の罪そのものを象徴すると同時に、罰の方法も示したわけである。度が過ぎた「もの食う口」に警鐘を鳴らす説教師が、その多くの教訓物語で人々に強く印象づけるのは、すでに十分腹を満たした会食者にさらにふるまわれようとする脂ののった雌鳥の臓腑からヒキガエルが飛び出し、それが酔っぱらいのワイングラスのなかに飛び込むや、逆に大食漢を呑み込んでしまう、という図だ。罪人はまた、悪魔の料理人や、ダンテの『神曲』(1307年～1321年頃)に登場する獰猛な地獄の番犬ケルペロスの爪と3つの口をもつ巨大な虫のなすがまま、いぶられた寸胴鍋で料理され、悪魔の口に直接呑み込まれてしまう。

金持ちと有力者の罪

これらの表象は信者に恐怖を抱かせ、グルマンディーズの罪の様相、特にその罪科を教示するに十分である。人々に罪を犯していることを認めさせ、それが確かに罪であると認識させ、「もの食う口」に対する告解を効果的なものとしなくてはならない。歴史家はこれらの表象を通して、当時のグルマンディーズについて定義することが可能だ。中世的表現では、大食家への批判は一つの性を対象にしているのではなく、男女ともに腹の貪欲に襲われうことを示す。一方、タッデーオ・ディ・バルトーロがサン・ジミニャーノ大聖堂に描いたのはでっぴりと太った修士や傭兵であり、かたやボローニャの画家ジョヴァンニ・ダ・モデナが示すのは、串焼き鶏に飛びかかって悪魔の角で目をえぐられる枢機卿であるといったように、社会階級や地位もしばしばグルマンディーズ

の罪の照準に入る。王侯貴族、宮廷人、町人、枢機卿の面々は、さまよえる大食漢の一団に連なる。ダンテ作『神曲』の煉獄篇第24歌では、教皇マルティヌス4世さえ、「ボルセーナ湖のウナギとヴェルナッツヤのワイン」を浴びるほど飲み食いした報いを受けている。

金持ちと有力者の罪として描かれたグルマンディーズは、こうして危険なまでに一段と重い2つの大罪に近づく。つまり、過剰あるいは贅を尽くして食べることに由来する傲慢の罪と、『ルカによる福音書』(16章19-31)が伝える悪しき金持ちと貧しいラザロのたとえ話^{xvii}に見られる吝嗇の罪である。大食家が食べ物に飛びつき、がつがつと食べる様子は、富を求めてやまない強欲な人間性を想起させるため、大食家と吝嗇家はキリスト教的施し、分け与えの精神を愚弄してイエス・キリストに象徴される貧しい人々に対して罪を犯したということになる。特に中世も終盤になると、食事に驚くほど散財をする人々の傍らで、施しを受けることなく犠牲となる貧しい人々への配慮はますます頻繁に見られるようになる。「一人の大食家が一日で使うお金があれば、多くの人々の空腹を満たしてやれることだろう」と13世紀ドミニコ派の説教師エティエンヌ・ドゥ・ブルボン^{xviii}は語り、また大胆王の異名をとるフランス王フィリップ3世の聴罪司祭ロラン修道士は大食家について「100人の貧者を十分に食べさせることができるのに、ただ自分のもの食う口のために湯水のごとく散財する」(1279年『悪徳と徳について』)と断罪する。15世紀末のアルトワ地方の司祭エロワ・ダメルヴァルは「大食家の生き方は悪しき金持ちそのもの」と強調し、大いに嘆いた。

地獄の食卓に描かれた多くの食べ物と飲み物、肥満した罪人、彼ら受刑者に永劫課せられる忌むべきものの強制的摂取とタンタロスの責め苦は、グルマンディーズという大罪の原因が、現世の食卓で美味な酒とご馳走を取り過ぎたということにあり、強欲と放縱の結果であることを明示する。とはいえ、会食者の食欲を刺激する串焼き料理の数々、それら豊かで贅を尽くした料理に合わせて供された気品高いワインが地獄の食卓にまでのぼっている状況についてさらに考察すると、当時、罪深い「もの食う口」あってこそ美味の追及もありうると認識されていたことも、十分理解できるのである。中世の神学者にとって大

^{xvii} ぜいたくと飽食に日々明け暮れる金持ちと、その門前で病身を横たえ、たとえ残飯でも飢えをしのぎたいと望みながら死んだラザロの物語。貧しかったラザロは死後、アブラハムとともに宴席につき、金持ちの方は冥府で炎にさいなまれることになる。

食漢の原型は、鶯鳥にイチジクを食べさせて脂ののった肝臓をつくり、フラミンゴの舌にソースをかけて食べた古代ローマの有名な食通アピキウスであったのかもしれない。

節制の賞賛

『君主の鑑』^{xviii} は、この世の権力者を食卓の危険な誘惑から守る書物である。大食鯨飲は、現世における貪欲そのものを象徴して暴君の特性とみなされるようになるが、その例はボッカッチョが『名人行傳』(1355—1360) に描いたサルダナパール王や、高位聖職者ピエール・ダイイの詩「暴君の人生はいかに悲惨であるか」(1398—1402) に見ることができる。14世紀初頭の『フォヴェル物語』^{xix} では、悪しき貴族を寓意化した悪徳の鑑といえる主人公が「酩酊」「暴食」「陵辱」が奏でる管弦楽をバックに、ヴェース・グロワール（「空虚な名誉」の意）と婚姻関係を結ぶ。その結婚披露宴の客に出されたのは「自然に背いた罪」の揚げ物、「嫉みの罪で糖衣がけした」菓子など悪徳を表すご馳走で、彼らはそれを次々とほおばり、婚礼は墮落の大饗宴に達する。暴君の飽くなき食欲が暴き出すのは、その利己主義、狂気、貪欲、権力、また性的快楽や物欲を前にした鎮まることを知らない渴望である。それは、おべっか、淫蕩、中傷、裏切りなど、口の濫用による悪徳が日常茶飯事であった宮廷を表現し、その支配者を待つ不吉な運命を予感させる。暴君は自らの感覚に支配される軽蔑すべき人間であり、神より自らの腹を大事にし、パウロの警鐘などものともしない。彼はキリストの敵であり、その恥ずべき仕業が大食鯨飲として署名される。

食卓はこのように放蕩の場所そのものとして表現されるが、一方でそれは、教化と完徳の模範を示す場所でもありうる。イエス・キリストの食事の場面が宗教的共同体の食堂に描かれた当初の意味は、そこにあるのではないか。また、キリスト教の聖人伝は伝統的に、食べ物を節制する徳を強く奨励する。聖王ルイことルイ9世（1214～1270）はその完璧な典型である。その伝記から、列聖式を控えた王が自らに、賞賛に値するほどの食に対する謙虚さを課していたこ

^{xviii} 多くはヨーロッパ中世に、聖職者が世俗の支配者に向けて著した忠告や、倫理的また宗教的要請の書。

^{xix} 14世紀初頭に韻文で書かれた絵入り物語。当時の墮落した教会や政界に対する強烈な風刺で名高い。主人公のフォヴェルは悪辣なロバで、権力者に成り上がる。モデルはフランス国王フィリップ4世の寵臣アンゲラン・ドゥ・マリニーであるとされる。

とが読み取れる。世俗の人間に求められる規則を超越し、托鉢修道会の食の節制にまで歩み寄ろうとしていた王だが、大宴会の際には自らの階級とその義務の遵守を心がけ、健康に配慮することを忘れない。王は身を賤しくして、自らのワインをたっぷりの水で割り、節度の遵守によって、焼鶏用の香辛料の効いたソースや美味しいスープを水で薄める。串焼き肉は口にせず、滋養のある好物の料理も避けて、それらを施しとして醸出した。そしてむしろ自身の味覚に合わず、その階級では食べることのない庶民的で粗野とされる豆などの食べ物や、四旬節で出されるビールのような飲み物をとる。聖王ルイはまた、食卓で羽目はずすとつい犯してしまう悪口、悪態、流神など舌の罪とも戦い、食卓で道徳的な会話を心がけた。君主たるものは「食べ物に対しても誠実で信義に厚く」あらねばならず、その態度が節度と慎みという知恵を備えている証となる。聖王ルイの同時代人、カステーリア・レオン王国のアルフォンソ 10 世賢王（1221～1284）もまた周囲に飲食の節制を課そうと、その意図を『七部法典』のなかに込めた。ポルトガル王ドゥアルテ 1 世（1391～1438）も『忠実なる助言者』のなかで、グルマンディーズの罪がもたらす災いに言及するのを怠らない。

食べ物を自ら切り詰める姿勢は、その後も救済の摂理において賞賛すべきものとして継承される。13 世紀の韻文物語「聖杯の探索」で、円卓の騎士の一人ランスロがある隠修士に肉とワインを控えるよう命じられるのもそのためである。アーサー王物語には、高貴な騎士の食事としてパンと肉、そしてワインが登場するが、パンに水と野菜が添えられる場合は、隠修士の世界での禁欲生活を表す。神秘主義のシエナのカテリーナ^{xx}の例からは、当時、食事を拒否することが聖性へと近づく道とされていたことが分かる。とはいえ、教会が食べ物を前にしたこうした聖化的行為を当然の習慣として信徒に課した、というわけではない。厳格なジャン・ドゥ・ジェルソンは、食に対する苦行の行き過ぎは人をグルマンディーズ以上に重大な二つの罪、つまり器官の疲労によって引き起こされる憤怒と、非凡な行動を自らに課したことからくる傲慢とに陥らせる、と警戒している。道徳家や教育者は節度を尊重し、自らの肉体に十分な食事を与えない者は過剰な食べ物を欲求するのと同様に罪深いと力説し、神学者

^{xx} 裕福な家庭の子女に生れ、ドミニコ会の尼僧となる。多くの日々を断食して過ごしたといわれる。

トマス・アクィナスもその例に入る。この『神学大全』(1271～1272)の著者は、飲食の欲望と味覚の喜びは神が望まれているのだから罪深くはなく自然なことであるとし、それ自体を悪いものとは考えない。しかし、人間を動物的なものに貶める「食べ物への常軌を逸した欲望」は非難する。食べ物に対する理性的な欲望は何よりも節度と均衡、社会的な品位の問題に関わっており、人間の肉体的生理学的欲求に應えるだけでなく、会食者の精神的充足と同席する人々との種々のやりとりにも関与する。13世紀、食生活の理想は絶食から節度へと変化した。

大食鯨飲に対する道徳家と教育学者の意見

教会は、人が口にする食べ物が何であるかによって社会階級が特徴づけられること、食物摂取によって感じる喜びが人間にとって自然なものであること、また食事を通しての懇親性が社会に必要であることを認め、世俗の人々にグルマンディーズの罪をいかに適正に周知していくかを問題にする。よき振る舞いは通常、人間の道徳心の現れであると考えられるため、食卓での立ち居振る舞いを規準化することが、「もの食う口」の罪と戦う道になる。グルマンディーズを動物的なものへと貶めず、それが危険な仲間である饒舌と色欲を呼び起こさないように努め、それを文明化していこうとするのである。道徳家、教育学者、教会関係者は、獣さながら欲望のまま大食鯨飲するような卑しい情景を社会から追放し、同時に食べる喜びを容認しようと試みる。

グルマンディーズが獣性を帯びると、人間は理性から遠ざかる。貪欲な食欲とががつした凶暴性を見せて咀嚼する人間は、道徳家の筆のもと、動物そのものとして描き出された。フランス国王シャルル6世の忠実な陪食官でもあった詩人ユスターシュ・デシャン(1346～1407)は「こちらでは亀のように唇を動かし、[中略] あちらでは雌猿のようにしかめっつら……」と、さながら動物園と化した食卓の様子をバラードに詠む。また14世紀、フィレンツェ貴族の宴会の常連であったチャッコについて、ダンテは地獄篇第三圏で語り、ボッカッチョは『デカメロン』(1349～1351)で言及するのだが、そこでチャッコは「ブタ」という不名誉なあだ名で呼ばれている。聖職者と道徳家は食べ物の過剰摂取にともなう不品行を罪とし、公共の場となればなおさら非難する。贖罪司祭はなおも食べ続けたいがため吐瀉する行為を大食の罪の証左とし、教会関係者にそのように審判が下された場合は、まさにゆゆしき問題となった。15

世紀イタリアでは数々のフレスコ画が、そうした人間の無軌道ぶりを「食べ物の取り過ぎで吐瀉までいとわない大食漢」として描いている。

このように、12世紀以降に普及した道徳においては、食べられる料理の量と質よりも、会食者に許される振る舞いの方がより厳しく戒められ、そこで求められる秩序と清潔感が食卓の情景のなかに表現され、中世の写本を飾ることになる。アラゴン王アルフォンソ1世の主治医ペトルス・アルフォンシは著書『賢者の教え』のなか、食卓での立ち居振る舞いを述べた章で、食べ物を大きな塊のまま飲み込むことは獣のような貪食の証であり、食事の時間を待てずにパンを食べるのはその人の短気を、もっとも美味しい部位を独り占めするのは悪しき教育を暴露するものだ、と断言している。親から息子への忠告として著された本書は、西ヨーロッパ、イベリア半島の地中海沿岸から、遠くは北欧の地域に至るまで広く読まれ、大成功を収めた。13世紀になると、食卓作法のほとんどはその地域固有の言葉で執筆される。執筆したのは聖職者、公証人、裁判官、教育学者また医者などで、とりわけイタリア北部や中央部の町で非常に多く見られたが、その例としてミラノの詩人ボンヴェシン・デ・ラ・リーヴァの『食卓における50の礼儀』を挙げておきたい。著者は1204年頃、会食者の身分を尊重し、獣性やさもしさを感じさせる立ち居振る舞いが周囲に嫌悪感を抱かせることがないように配慮し、食卓における衛生、礼儀、節度を定め、それを書き記した。

以下が10番目の礼儀である。喉が渴いたときは、まず食べているものを一旦飲み込み、口をよくぬぐってから飲み物をとること。

大食鯨飲は、口を空にしないでぐいぐいと飲み込み、ともに食卓を囲む人に嫌気を起こさせる。

以下は16番目の真実である。スプーンで食べる時、音を立ててすすってはならない。自分のスプーンをそのように使うのは、男でも女でも、餌をむさぼり食う獣と違いはない。

『グッリエルモへの教え』(13世紀作者不詳)は、食べ過ぎが社会的無作法であると強調するが、そうである理由として、充足することを知らない人間に見えるからだと述べ、そのような振る舞いは飢えた貧乏人特有のものであり、有力者にはありえない姿だと語る。

こうした書物は聖職者、貴族、そして町人の食卓における不品行を封じ込めようとする目的で、ヨーロッパ全土にわたり実に数多く書かれた。アーサー王物語や中世末期の物語さえ、こうした教訓を含んでいる。ドイツでも、イタリア人聖職者トマシム・フォン・ツェアクレーレが『イタリアの客人』(1215～1216)のなかで、若い貴族に向けて、指をつけるのは自分の食べ物だけにする、最初の料理が給仕されないうちにパンを食べてはならないこと、口一杯に食べ物をほおばったまま飲んだり話してはいけないこと、飲み物をとりながら自分の周囲をじろじろと見てはいけないこと、隣の人が選んだ料理に飛びついてとってはいけないことなど、食卓で遵守すべき姿勢を教えている。イングランドでは1475年に『若者のための書』が書かれ、貴族の子弟に、食卓では特に鼻、歯、爪をほじくらないようにと諭す。フランスでも同様に、ドミニコ会修道士ヴァンサン・ド・ボーヴェ（13世紀）は、ルイ聖王の息子たちのために『貴族の若者への教え』を執筆し、食卓での王族の不品行を指摘し、啓発している。

ある人たちは、さっさと食べてしまいたいのか、いくつもの料理をかきこみ、脂と汁をしたたらせながら食卓を回り、他の会食者を突き飛ばし、次々に倒すと、今度はパイ料理の中身をほじくり回し、大皿に皮だけ残している。

[中略]また、ある人たちは指だけでなくスプーンも使って野菜をとり、それで腹を満たすと、すぐに手をきちんと洗う。

以上、12世紀からはじまった習俗に関する文明化の経緯を辿ってきたが、ドイツの社会学者ノルベルト・エリアス（1897～1990）がその古典的研究で明らかにしたように、当初上層階級の食卓のみを対象としていたものが、その後ゆっくりと社会に浸透していくことになるだろう。キリスト信者でユマニストでもあったエラスムスは、中世の修道士の規律、礼儀作法書、王侯貴族への指南書、その他若者へのさまざまな教育的忠言をもとに教育を受けた人物であり、彼の名高い『子供への礼儀作法についての覚書』(1530)の内容は、すでに述べた最初の規準化から汲まれたものだといえる。その他、多くの礼儀作法も同様である。「大食鯨飲＝悪しき教育」という方程式は、そのまま後世へと伝搬されていく。

グルマンディーズは健康を損なうか

食べ物への理性を欠いた執着は、社会秩序や罪の救済の障碍になるだけでなく身体の健康にも影響を与えると述べ、教会は人々を「もの食う口」の危険にさらさないように指導を一層強化する。13世紀から、聖職者の権威は人を罪へと誘うさまざまな生理的な危険をいい立て、なかでも健康面でグルマンディーズに多く言及した。優れた贖罪司祭は、悔悛者の苦しみにはグルマンディーズが原因で生じた肉体的疾患が関与しているのではないかと問うたにちがいない。ルイ聖王の王子の贖罪司祭を務めたロラン修道士は「飲食には節度をもつてのぞみ、良好な健康状態を保つことはきわめて重要である。なぜなら、多くの人が間違った飲食によって、来たるべき日を待たずして命を失ったり重い病気になってしまうからだ」(1279)と警鐘を鳴らした。聖職者たちは、大食鯨飲がもたらす数々の苦悩や病気を並べ立てる。熱、だるさ、無気力、遅鈍、そして吐き気、嘔吐など消化の問題だけではなく、癲癇、麻痺、浮腫、また直接に死に至らないものの、太りすぎによる不妊も挙げ、恐れを抱かせるのである。「実際、肥満症で脂肪を蓄えすぎた肉体は実に有害で、もっとも深刻な病気を招く傾向がある。身体に自然の熱がこもってしまうのだ」(14世紀初頭)とイタリアのドミニコ会修道士ジャン・ドゥ・サン・ジミジャーノは記す。大食家のもっとも憎むべき悪徳は自らの肉体を損なう罪ではないのか、というわけである。一般信者にとっては、このような説教の方が、修道士が理想とする断食による魂の飛翔よりも説得力をもって伝わるだろう。

では、医者語る食餌療法はどのようなものだったのか。中世の食餌療法は、バランスと節制、そして個々人がどのような社会環境で生きているのかという点に基礎を置いていたため、明らかに教会が語る内容との共通点が見られる。健康を維持するためには過食も過度の少食もあってはならない。とりわけ消化不良を起こさないよう、前の食事が完全に消化し終わってはじめて新たに食べ物をとるよう心がけなければならない。「多すぎず、少なすぎず」は患者の年齢、性、その体質、気質、また職業や生活様式、社会的階級とも関係する。ジャン・ドゥ・トレトは大食鯨飲と無秩序な食事を断固敵視して、『健康の維持について』のなかで「大食鯨飲は剣よりも多く人を殺す」と警告するが、中世の医学が美味しいものを食べる喜びにまったく否定的であったかといえ、そうではない。むしろ逆で、美味の喜びが病人、妊娠した女性、また憂鬱質の人々に食べたいという気持ちを起こさせ、消化を助ける、とも述べている。アル

ノー・ド・ヴィルヌーヴやマイノ・ドゥ・マイネリは、自身の健康に関する書物のなかで調味の問題を取り上げ、病人が食事を美味しく味わえるように、また食欲がない人への配慮を示した。イタリア人医師マイノ・ドゥ・マイネリが著書『健康的な食餌療法』(13世紀)でソースについて割いた章は、その部分が独立した書物として広く普及した。健康な人がその状態を維持するためには、その人の体質にあったものを身体が自然に選んでいるのだから、自分の好き嫌いに合わせて食べていけばよい。同じことを、13世紀のシエナの医師アルドゥブランディノは「身体が健康なら、その人の口に美味と感じられるものはすべて、その人にとってこのうえない滋養となる」と語る。こうした教えは12世紀アラビアの有名な医学書『健康全書』にすでに見られるもので、この書物がラテン語、さらに俗ラテン語、ロマンス諸語へと翻訳されて、西欧の食餌療法に大きな影響を与えることになったわけである。つまり、味覚に快いものは害にはならず、その人がある食べ物に食欲を感じるのなら(生理的欲求)、それは結果として健康な食べ物を保証するのである。

甘味の食べ物さえ、中世には非常に好意的に語られている。甘蔗糖は薬剤師がとり扱い、17世紀まで治療用に用いられていた。砂糖は食べ物の消化に効果的だと考えられ、肉や魚、野菜に添えるソースに使われ、中世末期、またルネサンス時代の貴族の料理では、実に独創的なあの「甘酸」という味わいをもたらした。砂糖はまた上層階級で、食事の終わりに「食卓の締め」という表現で、具体的には砂糖菓子、ドラジェ、スパイスの砂糖煮の形で出された。ジャムは食後に胃を落ち着かせ、消化に役立つ特性をもつとされた。中世の薬学をもとに書かれた概論のなかには、医者であり占星術師でもあったあの有名なノストラダムスの著作もあり、その『素晴らしくまことに有用な小冊子』(1555)には美を保つ奥義とジャムの作り方が紹介されている。ノストラダムスはジャムの治療効果を示しながら、そこに味覚が関わることも忘れずに語っている。ルネサンスの宮廷医を務めたこの人物によれば、マルメロの実は「この上なく風味がよく、滋養強壯の薬としても、また時間を問わず美味しく食べられる、二つの用途をもった」ジャムをつくることができる。そこから遡ること4世紀前、イタリアでは筆名メジュと名乗る人物が、アラビア医学に影響を受けて『処方集』(12世紀)を著し、すでに美味しい薬を病人に提供している。そのなかには、マルメロをジュレや甘いペースト状に仕上げたもの、またアニスやクローヴ、麝香などの香りをつけた砂糖やハチミツのボンボンもあり、ジャ

ムのレシピのうち4つには甘蔗糖を使っている。このように眺めてみると、ギリシアの医者ガレノス（131—201）由来の医療の伝統においては、舌にとって不快なものは、胃をひきつらせる好ましくない食べ物とみなされていたようである。